



第84回

金利ある世界

※2025年2月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべき箇所を指摘していただきます。

資産を保有するシニア層にとって、金利上昇は「追い風」となる。少しでも有利な条件でお金を運用し、将来に備える動きが広がっている。

キャンペーンを行っていたのは、きらぼし銀の系列でネット専門のUI銀行。定期で半年預けた場合、「0・6%」の金利が付くという内容だった。

1 / 3

「こんなに金利が上がっているのか」。東京都世田谷区の男性は昨年9月、銀行がインターネット上で実施している期間限定の定期預金キャンペーンを見て、金利の大きさに心を奪われた。

一方、きらぼし銀の普通預金の金利は0・1%。1000万円を半年預けた場合、0・1%だと利息収入は約4000円だが、0・6%なら約2万4000円になる。「こんなに違いが出るのか」。キャンペーンは昨年10月末までだったため、男性はすぐにスマートフォンを操作し、退職金の全額をUI銀に移した。

男性は昨年8月末に長年務めた金融機関を退職し、現在は別の中小企業で経理担当の役員を勤めている。数千万円の退職金は、自宅の建て替え費用などに充てようと、付き合いの長いきらぼし銀行（東京都港区）の普通預金に入れていた。

預金金利は1990年代後半以降、低水準が続ぎ、2024年3月の定期（一年以上2年未満）の金利は平均0・036%だった。

日本銀行が同月にマイナス金利を解除後、金利は上昇に転じ、12月時点では0・211%まで上がっている。

今の職場で珍しい光景を見た。見かけたことのないメカバンクの行員がやって来て、「預金をください」と社長に訴えながら、資金管理のメインバンクを任せてほしいと熱心に営業していたのだ。

「やっと潮目が変わった。90年代前半まで6〜7%台を付けていた時代をよく知る男性は、時代の移り変わりをしみじみと感じる。

超低金利の間、銀行は企業や個人にお金をたくさん貸して少しでも利ざやを稼ごうと、金利の低さを競い合ってきた。金利が上昇すると、今度はお金を貸し出す源資となる預金を預けてくれる人が増やすべく、金利の高さをPRしている。

きらぼし銀は旧八千代銀行や旧東京都民銀行などを原流とする地域密着型の地銀で、資金豊富なシニア層の顧客を多く抱える。預金

争奪戦が激しくなる中、店舗がない分コストを抑えられる系列のU-I銀でキャンペーンを張って利用者を集め、金融サービスの提供につなげたい考えだ。

きらぼし銀烏山支店の担当者も「金利に敏感なお客様がさらに増えてきた」と手応えを実感している。IU銀は日銀が追加利上げを決めた1月24日から、定期預金(半年)の店頭金利を0・3%から0・7%に引き上げ、預け入れ額を増やしているという。

「金利のある世界」は富の遍在を加速させる。経団連は昨年12月、富裕層の資産や所得への課税を強化し、現役世代の社会保障料負担を抑えて「分厚い中間層」を形成すべきだと提言した。政府は医療や介護制度について、利用者の経済力に応じた負担のあり方を検討している。

一方、法政大の小黒一正教授(公共経済学)は「社会保障制度の見直しを小出しにて対処しても、国民の将来不安を払拭できない」と

指摘。診療報酬などの改訂率を調整しながら、中長期的な成長率に沿って医療費の伸びを自動的に調整する「医療費成長率調整メカニズム」の導入など、「より長期的な仕組みを検討すべきだ」と話している。